

## 序章 よみがえる溪谷の村ーダラエ・ピーチの診療所にて

埃っぽいペシャワールの喧噪に比べたら、ヒンズークツシユの深い山懐はまるで静かだった。つい一年半前までの激しい戦闘が嘘のようだ。神々しい銀白色の山々が、人間たちの蛮行と愚劣さを嘲笑するように、かつ無限の包容力で慰めるように、変わらずに我々を見下ろしていた。

茶褐色の荒寥たる岩石沙漠、抜けるような濃紺の蒼穹、氷雪から溶け出す清流、川沿いに点在するオアシスの村々、素朴な村人たち……もうすっかりお馴染みになった光景は、初めてヒンズークツシユの山々を訪れた十五年前と何も変わっていなかった。しかし、この何の変哲もない平和なたたずまいに感銘を覚えたのは、おそらく私だけではなかったろう。ペシャワールに赴任して以来、丁度十年目だった。あの長く重苦しいアフガン戦争の日々は、散在する村落の残骸に名残を留めていただけだった。

### ひとときの夢

一九九三年四月、私はJAMS(日本ーアフガン医療サービス)のダラエ・ピーチ診療所の進捗を見るためにアフガニスタンに入り、クナール河に沿って更に奥地のヒンズークツシユ山脈の一溪谷に滞在していた。一九八六年にJAMSが発足して以来、悲願であった「国内診療所」の第二号が軌道に乗りつつあった。そして、そこで接した「何の変哲もない生活」こそ、我々が人々と共に祈り、歳月をかけて奪い返した掛けがえのないものだったのである。



——一九七九年のソ連軍侵攻に始まる本格的な内乱は、三〇〇万人の難民をパキスタン北西辺境州にたたき出し、郷土を守る住民と政府軍との戦闘は凄惨を極めた。一九八八年にソ連軍撤退が実現するや、今にも難民たちが帰ると錯覚した世界のNGO(民間援助団体)が殺到してからは、事態はさらに混乱した。難民はびくとも動かず、戦闘は反って激化した。NGOは事実上ひきあげ、「アフガニスタン」は混乱を伝えられたまま世界の関心から遠ざかっていた。

だが今、眼前にする光景はどうだろう。自発的な帰郷が始まってから丁度一年、農民たちは自力で荒れた田畑をおこし、目を和ます豊かな田園の緑が静かに広がっている。かつて爆音と砲声にかき消されていた溪流も、白い峰々の氷雪と共に太古から変わらず、そうそうと流れてあったのだ。十年余のアフガン戦争なぞひとときの夢だ。世界の耳目をひきつけるカブールでの権力争いをよそに、農民たちは黙々と村の復興に励んでいた。農作業の合間には青年たちがJAMSの診療員と共にバレーボールにうち興じ、和やかな笑い声と掛け声が溪流の水音に混じってこだまする。これが、ついこの間まで殺気だった目付きでライフルと対戦車砲を手に、死闘を演じていた同じゲリラたちなのだろうか。審判がのんびりとライフルを背にしてゲームを観戦している。

